本学との学術交流協定締結校の紹介

中国医科大学（中華人民共和国）

（China Medical University）

交流協定締結年月日：1997年8月28日　主管学部：医学部

http://www.cmu.edu.cn/より抜粋

国際交流の特色（大学紹介）

中国医科大学は中国東北地方の中心都市である瀋陽に位置し、非常に古い歴史をもつ大学であり、また日本とも深い関係をもっているところでもある。現代医学教育・研究に中心的な役割を果たしている大学で、毎年数多くの人材を養成し、中国の衛生管理ならびに医学・医療のリーダーを輩出している。中国医科大学は12300名のスタッフ、15739名の学生を有し、また大学院には博士課程52、修士課程64の専門コースが設けられている。国際交流では、アメリカ、カナダ、フランスをはじめ世界の多くの国々と交流協定を締結しており、78の大学から留学生を受け入れている。本邦では慶応義塾大学、大阪大学、九州大学等の医学部と姉妹校になっている。

交流実績（平成20年度～22年度）

受入・派遣　年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
外国人留学生受入	1	0	0
短期留学生受入	1	0	1
外国人研究者受入	5	0	0

教員からの声

中国医科大学との学術交流協定は香川医科大学時代の1997年に締結されているが、それ以前も多くの留学生が本学に来ている。協定締結後も毎年多くの学生が、基礎・臨床医学講座を問わず留学してきたが、最近本学において国費留学生の採択数が激減し留学が非常に困難になり大きな問題となっている。今後、奨学金の確保や中国国内での支援体制の充実をはかるべきと考えられる。中国医科大学は従来日本との関係が深いため、日本語を話せる職員が数多くみうけられるのが特徴である。また、日本語コースでは授業が日本語で行われているため、来日当初より日本語を流暢に話せる研究者が多い。日本への留学環境は非常に整っているといえる。

（医学部教授）　竹内義喜

学生からの声

私は中国医科大学の大学院に在籍している学生です。昨年6月から、香川大学眼科学講座にて白神教授と廣岡講師のご指導のもと、眼球虚血と緑内障に対するレニンアンジオテンシンの効果について研究しています。

香川大学に来るまでは、私はとても緊張していました。しかし来てすぐに、香川大学の親しみやすい雰囲気を感じることができました。特に私が困ったときには、所属講座のスタッフや先生方は勿論、皆さんがとても暖かく親切に接してくださいます。

香川大学と中国医科大学との交流が永遠に続き、ますます多くの人がこの留学制度により恩恵を受けることができるようにと願っています。

刘　野（LIU　YE）

中国医科大学
(China Medical University)
ホームページ　http://www.cmu.edu.cn/

●学部学生　8,220 人（本科生のみ）　●教職員　7,974 人
●大学院生　3,775 人　●留学生　348 人

中国医科大学
協定校との国際交流事業の概要

竹内　義喜、三宅　実、内藤　直子、谷本　公重

はじめに

中国医科大学は中国東北地方の遼寧省の中心である瀋陽に位置し、医学教育・医療のセンターとなっている。瀋陽は人口約８００万の大都会であり、古くから日本との関連が非常に深い地域である。そのため、大学には日本語が話せる教職員を多数みうける。また、大学では日本語コースが設けられており、授業が日本語で行なわれているため、このコースを専攻した卒業生は実に流暢な日本語を話すことができる。最近では日本からの学部留学生がしばしば見受けられ日本語コースで勉学に励んでいる。卒業後は中国国内で医師として活躍できるのはもちろん日本においても所定の資格試験及び医師国家試験に合格すれば医師になれるとのことであった。中国医科大学とは１９９７年８月に本学と国際交流協定を締結するに至っている。中国医科大学は本邦では他に慶応義塾大学、大阪大学、浜松医科大学、九州大学などと、また、海外ではアメリカ、カナダ、フランスをはじめ多くの国々の大学と交流協定を締結している。

中国医科大学は歴史のある大学なので校舎によっては老朽化しているものもみられたが、最近では基礎・臨床医学の建物を新築あるいは増築し、特に附属病院は最先端の設備を有し、教育・研究・診療の充実がはかられている。分子生物学や神経科学等に関しても特別棟があり、世界的な研究がなされており、中国東北部における研究の中心的役割を担っている。

平成２２年度の中国医科大学との交流実績およびイベント

平成２２年度において、短期留学生を１名受入れ（眼科学講座）たが国費留学生や外国人研究者の受け入れはなかった。近年、国費留学生は採択人数が非常に厳しくなってきたため、留学生の数が激減しており、これに伴い大学院生の数も少なくなっている。今後、留学生をいかに増やすかが大きな課題となってきた。短期留学生については採択人数も比較的多いことから、現時点では少なくとも隔年に１人は留学してきている。留学生は大学院等を終えた後も、本学に研究者として残ったり、また日本国内の他の研究施設に就職したりして研究活動を行なっている。帰国後は、講座間等で共同研究を継続している場合も多々あり、非常に長いスパンで研究交流がなされているのが特徴である。

中国医科大学の宿舎を含めた生活環境は非常に整っており、学生の派遣も可能であると思われる。今年度末に国際交流委員長をはじめコーディネーター２名と医学科・看護学科の学生が中国医科大学を訪問予定である。

今後の交流の課題

最近、大学推薦による国費留学生の採択人数が極端に少なくなってきて、留学の実現化が非常に厳しい状況におかれている。その影響もあるのか、中国医科大学においては欧米への留学希望者が増加している。今後、本学への留学希望者に対する経済的支援を今後どのようにするかが一番の課題となっている。さらに、中国医科大学には看護学科もあり、将来的には本学の看護学科に大学院生としてあるいは外国人研究者として受け入れ、交流を活発に行なう必要がある。

その他、留学生受け入れに関しては宿舎の確保や家族も含めた日本語学習などが、また本学からの学生派遣では旅費、滞在費等の支援が課題となっている。

本学との学術交流協定締結校の紹介

河北医科大学（中華人民共和国）

（Hebei Medical University）

交流協定締結年月日：2001年11月27日　主管学部：医学部

国際交流の特色（大学紹介）

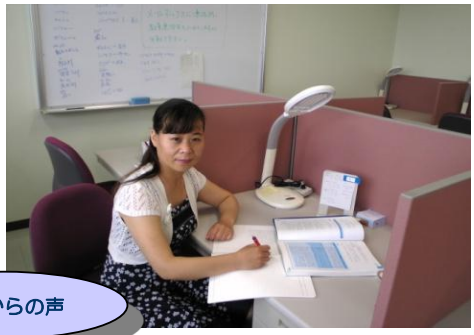
http://www.hebmu.edu.cn/より抜粋

河北医科大学は1915年に端を発し、他大学との統合を繰り返しながら1995年5月に現在の大学となっている。河北省石家庄市に位置し、昔から東西の交通の要衝としても知られている。大学の構成は、学部16、大学院博士課程18、修士課程64のコースである。学生数は本科生13300人、留学生50人（日本、韓国等）である。教職員は8000人を超え学生の指導にあたっている。さらに、河北医科大学は6箇所の附属病院を有し、非常に高水準な教育・研究・診療がなされている。また、日本をはじめ韓国、アメリカ、フランス等の海外の大学と共同研究を活発に行っている。

交流実績（平成20年度～22年度）

受入・派遣　年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
外国人留学生受入	4(3)	4(3)	5(5)
短期留学生受入	0	1	0
外国人研究者受入	1	2	0

（）は私費留学



教員からの声

河北医科大学は基礎医学院、口腔医学院、成人教育学院、薬学院、公共衛生学院、衛生技術学院、臨床医学院からなっている総合的な医学教育機関である。さらに、大学には6つの附属病院があり、非常に充実した臨床教育が行われているが、この中でも第4附属病院における食道がんの症例数は世界に類がないほど多く、諸外国の大学と共同研究が進められている。

また、留学生は看護学科修士課程にも在籍しており、今後ますます本学との交流が推進されることと考えられる。

（医学部教授）　竹内義喜

学生からの声

私は、河北医科大学第一附属病院の神経内科の看護師をしていました。

三年前に、香川大学の大学院へ留学しました。奨学金を頂いて、とても楽しく研究をしたり、大森教授とご一緒に老人ホームを見学したり、看護学生の実習の指導をしながら、私も色々と勉強させて頂きました。平成23年1月28日は、修論発表の日でした。あっという間の3年間でした。

大勢の先生や院生の皆様にサポートして頂け、心より感謝しております。皆様ありがとうございました。

私にとって、日本は第二の故郷です。

（老年精神看護学　大学院3年次）王 巍

河北医科大学
(Hebei Medical University)

●学部学生　11,800 人（本科生のみ）　●教職員　約 7,100 人
●大学院生　3,053 人　●留学生　50 人

ホームページ　http://www.hebmu.edu.cn/engp/brief.htm

河北医科大学
協定校との国際交流事業の概要

竹内　義喜、三宅　実、内藤　直子、谷本　公重

はじめに

河北医科大学は北京から南西へ約３００ｋｍのところにある河北省石家庄に位置する。この地は昔から西安･北京･天津などへの交通の要衝であり商業都市として大変栄えた所である。近年、高速道路だけでなく高速鉄道も整備され、北京－石家庄は２時間程度で行くことができるようになった。河北医科大学は街中にあるとはいえ、一歩門をくぐるとその広大な敷地内では静寂が取り戻せるほど広大な敷地に建っている。大学では基礎・臨床医学ともに充実した教育・研究・診療がなされているが、とくに臨床面では付属病院が６箇所もありそれぞれ特色をいかした診療が行なわれている。この中でも第四附属病院は腫瘍を中心としたところで、際立っているのは食道がんの症例が世界に類がないほど多いことであり、本邦をはじめアメリカ、フランス、韓国等諸外国との共同研究も活発に行なわれている。

本学との交流協定は２００１年１１月に行なわれている。協定締結当初は留学者も非常に少なく交流もわずかであったが、最近は教職員や学生の相互訪問が実施されている。

平成２２年度における河北医科大学との交流実績およびイベント

平成２２年度における留学生の受け入れは私費留学生が５人のみであり、国費留学生、短期留学生、外国人研究者ともなかった。研究論文や学会発表も数多くなされ留学生は多分野で活躍している。最近、大学推薦による国費留学生の採択人数が厳しくなった分、私費留学が増加してきていると考えられる。河北医科大学から本学への私費留学者で特徴的なことは、従来の国費留学の配偶者という身分ではなく、全くの個人で来学し博士課程あるいは修士課程の大学院に進学をしている点である。

河北医科大学との交流は、医学科のみならず看護学科との交流ももたれてきたということである。これは、４年前の本学看護学科教員の訪問がベースになっているものと思われる。また、語学研修で来学した学生の中に将来本学への留学を希望している人がいることは特筆すべきことである。

本年度は、6 月 15－17 日の期間、段恵軍副学長、張海林基礎医学院長、張文軍外事処処長の3名が医学部を訪問した。滞在中は、学長や医学部長への表敬訪問が行われ、双方の大学の紹介ならびに国際交流の現状について説明がなされた。さらに、張海林先生による学術講演（第 320 回　医科学談話会）が開催された。また、講演終了後は河北医科大学の留学生と懇談会がもたれさらに、総合生命科学センター実験実習機器部門に行き最新の分析機器の見学を行った。

河北医科大学内の宿泊施設は大変充実したものであり受け入れ体制は整っていることから、本年度末の本学教員・学生訪問では十分活用できるものと考えられる。

今後の交流の課題

課題としては中国医科大学とも共通しているが、やはり本学への留学希望学生に対する経済的支援である。大学推薦による国費留学生の採択人数が最近極端に減少し、留学が非常に厳しい状況にある。国費留学生と同様、私費留学生に対する支援も公的・私的基金から積極的になされる体制の確立が必要である。